生きていようが、生きていまいが

イマジンカイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生きていようが、生きていまいが

【Ｎコード】
Ｎ３２０１Ｖ

【作者名】
イマジンカイザー

【あらすじ】
死ぬのだって大変なことなんだよ、ということを一介のサラリーマンが知るまでのおはなし。短編予定だったものをぶつ切りにしたものです。

その一

「……４９の組、８９７９５６。こいつも外れか。ま、当たり前っちゃあ当たり前、だわな」

その日おれは、駅の構内でベンチにどっしりと腰を据えて、数枚の宝くじを札束のようにして並べ、新聞と手元のくじを目を皿のようにして眺めていた。

努力の甲斐なく、結果は全て外れ。一等の二億円、二等の一億円はおろか、四等の五万円すら掠りもしない有様だ。

別に金に困っているわけじゃないし、職だってある。目が霞む程の大金さえあれば、今の物の見方が変わるかもしれないと思っただけだ。

今月半ばで二十七を数えるこのおれ、生田成志（いくたなるし）。親族は数年前に他界し天涯孤独の身となったが、情報系の四年制大学を卒業し、システム・エンジニアとして毎日ディスプレイの画面とにらめっこをしている。

別にやりたくてなった仕事じゃない。夢もやりたい仕事もいくらだってあった。それら全てから見放され、今の会社に拾われただけだ。

友達と呼べる人間は一人もおらず、おはようございますとお疲れ様でしたの二言しか喋らない日だって珍しくない。やりがいはないが、他の職に就く手立ても資格を取る暇もない。生きていくには嫌でも続けていくしかない。

給料は保険や家賃その他を差し引いて、手取りで二十五万。ボーナスは年二回。会社から社宅を借りて生活している。こうやって連ねると聞こえは良いが、労働時間は日平均十八時間で、サービス残業は当たり前。三、四日会社で寝泊まりすることもザラだ。

五連勤開けでボロっちい社宅に戻って来ても、やることなんざ何もありゃしない。折角の休みも一日寝て過ごして、何もせずに終え

てしまうことだろう。おれは一体、何の為に生きているのか、さっぱり分からない。もうどうにでもなっちまえってな具合だ。
まあ、それも今となってはどうでもいいことだ。何せこれから、このくだらない世の中に見切りを付け、違う世界へと旅立つのだからな。

重い腰を上げ、黄色い線を越えてホームと線路との境界に足を掛ける。
――人身事故。器具も何も必要とせず、何より手軽に行える。自殺の定番と言えばこれだろう。三番ホームの左端、注意書の綴られた白い柱の陰。宝くじを見る前に何度か歩いて見つけ出した、駅員たちから死角になっている場所だ。
後少しで日付が変わろうというこの時間、これから帰宅する人や運転士たちには悪いが、間が悪かったと諦めてもらいたい。尤も、今から死ぬおれが気に留める必要はないのだが。
電車到着を告げる飾り気のないアナウンスが流れ、けたたましいブザーの音が鳴り響く。いよいよその時だ。運転席のライトに照らされないよう、ぎりぎりまで柱の陰に一旦隠れて様子を伺う。
警笛が鳴り、線路の先から電車が顔を出す。ここまで引き付ければ咄嗟に急ブレーキをかけても轢かれ損ねることはないだろう。
誰もが到着する電車に気を取られる中、おれは意を決し、線路の中に飛び込まんと足を踏み出す。
覚悟して踏み出したまではよかったのだが、床に走った小さな亀裂に足を取られ、突っ込む一歩手前で踏み留まってしまった。その代わりに携帯していた液体ミルメークの『イチゴ味』が、電車の運転席のガラスに飛び散ってしまう。
飛び散ったミルメークを血か何かと勘違いした運転士は、すぐさま急ブレーキをかけて電車を止め、乗り合わせていた乗客たちは勢いよく前方の車両に引っ張られ、慣性の法則に従って皆一様に押しつぶされて行った。

それによって電車が横転したわけでも、死人が出たわけでもない。しかし車内は押し潰された人たち同士で大混乱となり、阿鼻叫喚の様相を呈していた。

構内に待機していた駅員たちもこの異様な事態に気付いたらしく、続々と電車の方へと集まって行く。

まずい、非常にまずいぞ。この状況じゃ誰がどう見ても悪いのはおれじゃないか。どれだけかかるかは知らないが、個々人が電車を止めると相当な賠償金を請求されると聞いた。四百万ぽっちで足りるとは到底思えない。

駅員たちが皆運転席に行ったのを見たおれは、急いで体を起こし、脇目も振らず全速力で駅から逃げ出した。

◆◆◆

「なんとか……逃げ遂せたか。あっぶねぇ」

駅員の追及を逃れ、なんとか家の近所まで戻ってきたおれは、弾ませた息を整えつつ周囲に目をやり耳を澄ます。ここまで来て誰かに尾けられていました、だなんて洒落にならない。おれの頑張りは一体何だったんだ。

幸い誰にも尾けられていない。日付変更間近の住宅街は静かなものだ。尾けられていないのならそれで良い。これでようやく『二つ目の計画』に着手できるのだから。

何？　一つ目で終わらせる予定だったのに二つ目が出てくるのはおかしい？　そう思っているのはおれも同じだ。どうか気にしないでもらいたい。

１ＬＤＫの古臭い社宅に戻ったおれは、ベッドと兼用になっている三人掛けのソファの上で、掛け布団に包まって丸まっている愛猫のパンチョを抱きかかえ、「ただいま」と声をかけて台所の方へ向かわせる。相当腹が減っているらしく、おれを見るなり爪を立てて

にゃあにゃあと鳴き喚く。おれがいない時の飯の世話は管理人の婆に任せているはずなのだが、こんなになるまで放っておくとはどういうことだ。

婆に言いたいことは色々とあるが、そいつはちょっと後回しだ。脱ぎ散らかした服を畳み直して、窓辺に置かれた木製洋服タンスにしまい、押し入れの中に潜り込む。引っ越し以来一度も開けていない段ボール箱を掻き分け、奥にしまわれていた小箱を取り出す。

以前近所のホームセンターで買っておいたレジャー用の徳用練炭と七輪。部屋の中でこいつを燃やして、発せられた一酸化炭素で死んでやろうというのが二つ目の計画。俗に言う練炭（れんたん）自殺だ。

首吊りに手首を切って湯に漬けるリストカット。家で行う自殺方法は多々あれど、家の中に器具があったことを思い出し、かつ苦しまずに死ねるということでこの方法を選んだ。どうせ死ぬなら苦痛なんか感じない方が良いに決まってる。

壺の中に練炭をくべ、金網で蓋をした後、マッチに火を点けて壺の中に放り込む。炭はぱちぱちと音を立てて赤く燃え始めた。

後は中毒にやられ、自然に気を失うのを待つばかり。煙が部屋中に広がる前に、おれは『遺書』を書こう筆を執る。

残そうが残すまいが死ぬことに変わりはないが、何も告げずに命を絶って、後々”孤独死”だ何だと騒ぎたてられたくはないし、そのことで会社の同僚たちに迷惑をかけるのも忍びない。

「死ぬ理由、おれの略歴、伝えたいこと……良し。あとは、”財産”のことだけだな」

財産、と言っていいのかどうかは分からないが、通帳には四百五十万円程度の貯金が残っている。貯めるだけ貯めて、使わずに残った給料だ。

放っておけばおれの遠い親戚の元で分配されるのだろうが、一度も会ったことのない親戚に、おれが汗水垂らして稼いできた金を差し出すのは癪だな。はてさて、どうするべきか。

そうだ。大好きなミルメークの製造会社に全額寄付する、とでも書いておこう。名前すら知らない親戚に寄付するよりも、好きだったものの発展の為に投資する方がずっと良い。

折角だ、『製造を中止したピーチ味を復活させてください』とでも書き添えておくべきか。いや、やめておこう。それが目的の自殺だと世間に思われるのは嫌だしな。

これで良し。丁度良く体に悪そうな黒い煙が、七輪の中からもうもうと立ち上り始めた。面倒を起こさず死ねるよう、七輪に顔を近づけ目を見開き、その時を待つことにする。

段々と気分が悪くなってきた。苦しまずに死ねるという触書は嘘だったのか？　まぁ、このくらいの苦しみは許容して然るべきなのだろうが。

煙を吸って咳き込んだ所で腹の虫が唸りを上げた。そういえば昼ごろから何も食べていなかったっけか。どうせもう死ぬんだ。それまで我慢してやろうと思ったが、体の方はどうにも正直でいけない。

それと同時に、金網だけを載せ、もうもうと煙を上げる七輪が目に留まる。もう我慢できない、冷蔵庫の中に何かあったはずだ。膝に乗せたパンチョを離し、冷蔵庫の中を探る。

あまり家に帰らないし、帰っても冷凍食品や出来合いのもので済ますからか、冷蔵庫の中に使えそうなものは見受けられない。いや、サンマが一パック残っていた。いつ買ったものか、何に使ったものかは分からないが、焼いて食うのだから問題はないだろう。

サンマに塩を振り、七輪の上に乗せて団扇で扇ぐ。芳しい香りを漂わせ、徐々に焼けて行くサンマを見、小学生の頃のサマーキャンプで焼いた鮎や岩魚のことを思い出して、自然と笑みがこぼれる。あの時は生焼けに砂利だらけで味なんか分かりゃしなかったなあ。

しかしサンマの焼ける匂いというのは卑怯だ。おれの中にある食欲をこれでもか、と言うくらい引き出して来やがる。サンマだけじゃ味気がない。他に何かなかったろうかと冷蔵庫の中を再び漁る。

買置きの液体ミルメークと牛乳瓶が並んでいるだけで、食べ物になりそうなものは全く残っていなかった。
せめて大根下ろしと醤油があれば違っただろうにと肩を落とし、七輪の元へ戻る。

「おい、おいおいおいおい！　何やってんだパンチョ！　どけ、七輪から離れろよッ」
迂闊だった。美味そうな匂いを上げて焼けるサンマを、おれと同じく空腹の猫が放って置くわけがない。
パンチョは後足だけで立ち、熱された金網を触らないようにして、爪を立ててまだ生焼けのサンマに前足を伸ばしている。
父母のいないおれにとって奴は家族同然だが、あのサンマは文字通りおれの最後の晩餐だ。パンチョにだって譲るわけには行かない。
そこをどけ、やめろなどと叫びつつ、パンチョを七輪から引き剥がさんと手を伸ばす。だが伸ばした手がパンチョの体を捉えるどころか、奴の代わりに七輪を掴んで思い切り転んでしまう。
部屋に充満した一酸化炭素は、おれが気付かないうちに相当脳を蝕んでいたらしく、視界が霞み意識がぼやけ、まともに動くことすらできなくなっているようだ。
七輪の中にくべられた練炭は放物線を描いて部屋中に散り、カーテンの裾や万年床になった敷き布団、読まずにたまった古雑誌などに触れて火を吹き始める。
パンチョへのお叱りもそこそこに、薄汚れた座布団を手に取って鎮火に当たる。
部屋中に散ったとはいえ、まだ燃え始めの小さな炎。揉み消すのに大した時間はかからない。尤も、直接練炭がぶちまけられた畳は無事では済まず、あちこちに焦げの染みが残ってしまった。
管理人の婆からこっぴどく叱られるだろうが、どうせこれから死ぬわけだし、気にすることはないだろう。
窓を開けて七輪の煙を部屋から逃がす。練炭自殺は一次中断。き

ちんと腹を膨らませてからにしよう。
清涼感溢れる新鮮な空気が部屋の中、及びおれの肺を包み込む。気持ちが良い。悪くない感覚だ。
だが同時におれは、自身の背後に何かが焼き焦げ熱く燃える感覚と、鼻につく嫌な臭いを感じた。今まで獰猛(どうもう)機敏に動き回っていたパンチョも、そちらを見て産まれたての子猫のように震えている。
程無くして臭いの正体に気付く。六段の木造洋服タンスが練炭と接触して燃えていたのだ。
見ると、タンスの一番上の段から順々に燃え広がっている。見つけやすいようにとはみ出させておいた遺書が、先の飛び散った練炭と接触して燃え始めてしまったのだろう。中の衣類に次々と飛び火し、勢いを助長させている。
「火は全部揉み消した筈だぞ、どうなってやがんだ、あぁもう！」
死にたい気持ちに嘘はないが、他人を巻き込んで焼け死ぬなんざ御免被る。おれは再び座布団を手にし、タンスの火を消火せんと何度も叩くが、座布団程度では炎の勢いを御し切れず、逆に貰い火で燃え上がってしまった。

「やべぇ……やべぇやべぇやべぇ！　どうすりゃいいんだよ、こんなの……」
火の手はタンスを越えてその下の畳にまで達し、益々勢いを強めて行く。ここにいては危険だ。おれはパンチョを抱き抱えて風下である玄関へと向かう。
リビングから玄関まで５ｍもないのだが、練炭の煙を吸った影響が強く残っているようで、転んだまま立ち上がれず、上手く歩けない。それでも尚、体を引きずって前に進むが、今度はドアノブを握ることができない。火はますます燃え上がり、おれの靴下を焦がして行く。

「待ってくれ、待ってくれよ！　おれは確かに死にたいって言った、

けどこんな……七輪倒して焼死体なんて、そんな間抜けな死に方なんて望んじゃいないんだよ！　誰か助けて……助けてくれェ」
叫べども戸を叩けども、誰も助けに来やしない。お隣同士だというのに何と酷い奴らだ。
やはり人の力など当てには出来ない。自分の力でこの部屋を脱出しなくては。そう思って力を振り絞り、ようやくドアノブに手が届いたその瞬間、玄関はおれが開けようとしていたのとは逆の方向に開き、伸ばした右手は扉と壁でサンドイッチにされてしまった。
挟まれた右手を引き寄せるよりも早く、おれの背中を踏み付けて、何者かが強引に部屋の中に押し入った。
部屋の中に押し入った何者かは、慣れた手つきで消火器を操作し、燃え盛る炎をあっという間に掻き消していく。白と黒の煙が晴れ切った時、その場所に立っていたのは、予想だにもしない人物であった。

「あんた、夜遅くに家ん中で何やってんだい！　部屋の中で七輪焼いて……近所の人がどれだけ迷惑するか、分かってんの！？」
「婆――あぁいや、管理人さん……。申し訳、ありません」
仏像のような茶髪のパンチパーマに、目元口元に刻まれた深い皺に、酒樽みたいな体つきの婆。こいつがうちの社宅の管理人だ。
顔を合わせりゃ、やれ態度が悪いだの不摂生だのと文句を言い、おれに友達や家族がいないことを知りながら、休みの日に戻って来た時には「浮いた話の一つや二つないの」と問い、答えを返すよりも先に、「あんたには無理だったかしら。ごめんなさいね」と皮肉たっぷりに言いやがる嫌なやつ。
「苦手な奴ほど信用できる」とは言うが、まさかこのクソ婆に救われるとは……。
「あぁ、あぁ、あぁ、あぁ。居間の半分も燃やしちゃって……馬鹿じゃないの？　ちゃんと修理代払いなさいよ。給料の前借りとかじゃなく、あんたの自費よ自費！　困るのはあんただけじゃないのよ、

この寮に住む人も近隣住民も、何よりあたしが困るの。ちょっと、聞いてるの！？」

俺を起き上がらせもせず、畳みかけるような早口で文句ばかり。うんざりするにも程がある。

さっき死にたくないと言ったが、あれは却下だ。こんな奴に恩を売られたまま生きていけるものか。死んでやる、なんとしても死んでやるぞ！

……そのためにはまず、こいつをを何とかしないといけないのだが。何と言えば追い払えるだろう。

その二

◆◆◆

七輪横倒しが原因で起きた小火騒ぎから一時間後。婆の追及をかわして社宅から逃げ出したおれは、眠ることを知らない夜の繁華街に足を踏み入れていた。

相当疲労が溜まったし、頭はまだずきずきと痛むが、そのような騒ぎのいさかいを風俗だ何だで癒そうとしているのではない。

人身事故や練炭のように周りを巻き込み、多大なる迷惑をかけるようなやり方はもう止めだ。大体あのような死に方では苦痛も何もなく、死んだ気がしないではないか。いつの間にか死んでました、では格好が付かないというか、わざわざ自殺という手段を取った意味がない。

こういった街の外れには、酒の勢いで自制が効かないサラリーマンに、世の不平不満を暴力で発散せんとする非行少年少女やら、公に出来ない後ろ暗い職業持ちの輩があふれかえっている。奴らに喧嘩を売り、揉み合いの末にわざと刺されてやろう……ってなところだ。

ズボンのポケットに、缶切りなどと同様になった万能ナイフを一本忍ばせておいた。相手を怒らせ掴みかかる際に、こいつをわざと大仰に振り回し、その末に相手に奪わせてやろう。落とした振りをして拾わせるのも良いかも知れない。

準備は万端。いつ刺されても問題のない心構えも作った、のだが――目ぼしい奴らは一向に見当たらない。最近は警察の取り締まりも厳しくなっているし、泥酔した酔っ払いや非行少年は、こういう時間帯になる前に補導なり何なりされているのだろう。

社会的には夜間徘徊者のいない平和で素晴らしい街なのだろうが、おれみたいな自殺志願者からすれば、それは厄介以外の何者でもな

い。なんてことをしてくれたんだと行政に文句を言いたい所だ。
まぁ、文句を言った所で何かが変わる筈もなく。文句を垂れる暇があるなら、その分足を動かせということか。全くもってその通りだ。返す言葉もない。

そんなことを考え、異様に薄暗い歓楽街の裏通りに足を踏み入れた所だろうか。おれの耳に女のか細い声が届いた。風の音か？　それにしては妙だなと、さらに耳を澄ませてみる。そんな優しく耳障りの良い音なんかではない。か細いながらも絶え間無く響く、発情した女の淫らな喘ぎ声だ。
モーテルやホテルは近くにないのに、この声の主はこんな場所で何をしているのか。目立たないとは言え屋外だぞ。羞恥心というものを持ち合わせていないのか。
気になって居ても立ってもいられなくなったおれは、当人たちに気付かれないように、こっそりと声のする方へと向かって行く。
道を奥へ奥へと進み、薄いベニヤ板で隔てられた場所を無理矢理通り抜け、向かいの通りに足を踏み入れる。今までいた場所と負けず劣らず薄暗く、酒臭い空き缶空き瓶が散乱し、足下を数匹のネズミが這い回っていた。
声の主――淫な喘ぎ声の女はそこにいた。相手方の男に前から乗っかり、舌と舌を絡めて互いの唾液を交換し合っている。
元々薄暗いうえに、遠方の灯りが逆光となって顔は分からないが、背中まで伸びた艶やかな髪に、出るところは出て、締まるところはきっちり締まった体付き。
身に纏った太股の中程までの丈の肩出しワンピースが、元々美しい体の線をより際立たせている。ラメ加工が施されているようで、光を受けると星の瞬きのような絢爛（けんらん）な輝きを放っていた。
対する相手方の男は、赤色に横縞の入ったタンクトップに、焦げ茶色のカーゴパンツを穿いている。女と同じく逆光で顔は見えなかったが、一見すると海草か何かが絡み付いているかのような、複雑

な刺青を拵(こしら)えた、太く力強そうな両腕に、タンクトップ越しからでもはっきりと分かる厚い胸筋。どちらもおれのそれとは大違いだ。勝ち目はない。

似合いの二人じゃないか。おれみたいなのが出歯亀して何になる。見つかる前に立ち去ろうかと思ったのだが、抱擁と口付けを交わし合う女の顔を見て気が変わった。

なんだあの顔は。なんだあの息遣いは。悦んでいる奴の顔か？いいや、あれはそういうものじゃない。嫌がっているのに無理矢理抑え付けられて苦しんでいる顔だ。

正義感なんてない方が楽しく生きて行けるし、持っていると自覚したこともなかったが、気が付けばおれは、男の方へと駆け出して、二人を無理矢理引き剥がしていた。

「もう大丈夫だ。さぁ、早くお逃げなさい。おれが囮になる。さぁ、さぁさぁ！」

相変わらず顔は見えないが、おれの言葉に促され、女性は薄暗い通りの中から去って行く。酒臭く薄暗い通りには、淫らな逢引を出歯亀した男と、されて怒り心頭の男の二人が残された。

あぁ、おれは何をやっているんだと、恥ずかしさに頬を紅潮させてしまう。美しい女性にかっこいいところを見せて株を上げたかったのか？　今更そんなことをして何になる。おれは今から死ぬんだぞ。

「何なんだてめぇは。誰に何やったか分かってンのか、あァん？」

「いや、あのですね……出来心と言いますか、そのぅ」

出来心って何だ。反論にすらなっていないじゃないか。何をしたかなんて、むしろおれが知りたいくらいだってのに。

「そんなことはどうだっていい。誰に何したかって聞いてンだよ」

おれの煮え切らない態度に男はさらに苛立ち、胸ぐらを掴んで壁に叩き付けた。こりゃもうダメだ。さっさと謝ってこの場から立ち去ろう。拳骨の二三発は覚悟しなきゃならないだろうが、仕方がな

い。
「あぁいやその……なんか、すみません」
「何いきなり謝ってンだよてめぇは！　誰に何やったかって聞いてるんだろう、誰が謝れっつった！」
まずい、完璧に逆効果のようだ。下手に刺激しない方が、なんて段階はとっくに通り越しているらしい。あぁあ、目が血走ってるじゃないか。こりゃあただじゃ済まないぞ。誰がって？　彼と相対するおれが。
しかしさっきから「誰に何をしたか」としつこいな。そもそもこいつは一体何者だ？
「申し訳ありませんが、どちら様でしょう」おれは声を絞り出して男に尋ねた。男はおれを壁から離して床に投げ捨て、懐に右手を入れて答える。
「よくぞ聞いてくれましたぁ、っとぉ。俺はあの『盛森組』の若頭さ。てめえみたいな調子に乗った馬鹿を今まで十四人ばかり殺(バラ)して来た、組の有望株よ。喜べ糞野郎、てめぇで十五人目だ」
そう言われても、盛森組なんておかしな名前の組に聞き覚えはない。まぁ確かに、彼の体付きは”盛森(モリモリ)”と言っても差し支えのない代物ではあるが。
拳銃の激鉄を起こし、どこか切れた目付きでおれに銃口を向ける彼を見て、分かったことが二つある。一つは彼がこういった物騒な出来事の処理に手慣れた職業の人間であること。二つ目は逢引を出歯亀したおれを、彼は決して許さないということだ。
堅気の人間なら銃口を向けられた時点で竦み上がり、助けてくれと両手を上げることだろう。しかしおれは違う。夜の繁華街を肩で風を切って歩くこの男。銃の扱いに慣れ、人を殺すのに何の抵抗も持たないこの男。おれの理想に直球じゃないか。そうそう、こういう物騒な奴を探していたんだよ。
だが銃はまずい。下手に眉間なんかを撃たれて、死に行く感覚を味わえないまま逝くのは御免だ。おれは男が引き金を引くより早く、

ポケットから万能ナイフを取り出して、それを振り回しながら男に掴みかかった。
「野郎ッ、妙に自信があると思ったら刃物なんか持ってやがったのか！　舐めやがってッ」
おれは無我夢中にナイフを振り回し、男の手から拳銃を叩き落とさせる。男はおれがまさか刃物で反抗してくるとは思わなかったようで、落とした銃を拾うことなく慌ててておれを引き剥がそうとするが、それも最初のうちだけだ。
男はおれが考えなしにナイフを振るっていることに気付き、冷静さを取り戻した上で、おれの手からナイフを奪って刃先をこちらに向けた。
「こんなもんで俺は殺せねぇよ。残念だったな」
「何が残念だったな、だ。途中まで相当びびっていたくせに。おたく、本当に暴力団の若頭なのかい？」
「よぉしよし、喧嘩売ったのはてめぇだぜ。覚悟しな！」
暗がりに逆光で殆ど見えないが、恐らく彼の顔は真っ赤なのだろう。よしよし、作戦通りだ。後は奴がおれの体を刺してくれるのを待つばかり。痛みと共に死に行く感覚を味わいながら、この世に別れを告げて逝ってやる。
立派な体躯の大男よ。夜の営みの邪魔をして悪かった。遠慮なくおれを刺すがいい。謝って許してもらえるかは分からないが、君は何も悪くない。自殺に君を利用したおれが悪いんだ。おれを刺したことであんたは警察に追われるかもしれないが、彼らがおれの”遺書”を読めば、非は全ておれにあると分かってもらえる筈だから。
そう、『遺書』を読めば――いや、ちょっと待てよ。遺書は確か……。
「やべぇ、遺書はさっき、タンスと一緒に燃えちまったんだった！」
あぁ、何て凡ミスをやらかしちまったおれは。おいおいまずいぞ。遺書がなけりゃあ惨めな孤独死で終わっちまう。そうじゃない、何も残らない死に方なんて、何の意味もないじゃねぇか。おれは自分

の不甲斐なさに頭を抱え、思わず体を思い切り後ろにのけ反らせてしまう。
そしてそれこそが、おれの致命的なミスとなった。遺書のことで叫んでいたその時、既に男はナイフを構えて振り被っており、その刃先はおれの肺を目掛け向かっていたのだ。
余計なことをせず刺されていれば、おれは失血死であの世行きの急行列車に乗車出来たのだ。しかし遺書のことで仰け反ったことにより、奴の狙いは肺から僅かに逸れ、放たれたナイフは肺と肝臓の間にある横隔膜に突き刺さった。
痛みよりも早く、おれの喉から鉄臭く熱いものが込み上がってくる。口内はあっという間に、熱くどろどろとした何かで一杯になり、含んでいられなくなったおれは、溜まりに溜まったそれを目の前の男に向かって吐きかけた。
飛散したそれを顔いっぱいに浴びた男は、狂った豚のような奇声を上げると、おれの胸に刺さったナイフを引き抜いて、奴にもたれ掛からんとしたおれを蹴り飛ばす。口内に溜まった熱いものは徐々に喉の奥へと引っ込み、代わりに肺を伝って、傷口の方から出の悪い尿のようにちょろちょろと流れて出て行く。

何だ。何なんだ、光の速さで全身を駆け巡り、ずっしりと重く圧し掛かるこの痛みは。こんなもん死に行く感覚でも何でもねぇ、ただ激痛が走ってるだけじゃねぇか！
息が、あぁくそっ、息が出来ん。いくら吸い込んでも肺の中が満たされねぇぞ。視界は霞んでいく一方だってのに、意識ばかりはっきりしやがる。走馬灯も何もあったもんじゃない。
何が死に行く感覚を味わって逝きたいだ。こんな馬鹿なことを思い付いたのは誰だ。一時間位前のおれじゃないか。
誰にも責めを負わせられないことに気付き、自分の馬鹿さ加減に絶望したところだったろうか、おれを刺して蹴り飛ばした男は、左手で顔を覆い、おれを再び刺し貫かんと、ナイフを握る右手に力を

込め、（今のおれからすれば）凄まじき速さでそれを振り下ろした。
今度こそ死んだかと思ったのだが、身体中から脂汗が吹き出るこの痛みが止むことはなかった。ナイフの刃先はおれの顔から狙いを大きく反らし、八センチ程ずれたアスファルトに突き刺さったのだ。
「目潰しなんて狡(こす)い真似しやがって、どこだ！　どこにいやがるッ」
言われて、男の顔をちらと見る。彼の顔に赤黒い染みがこびりついているのが見えた。そうか、おれが吐いた血を浴びて、何も見えなくなっているんだな。今のだって、息遣いや何だでおれの位置を何となく察したにすぎないんだ。
「ちきしょう、何も見えねぇぞ……そこか、そこか、そこかッ」
目潰しを喰らって的が定まらず、男はただただ在らぬ方向へとナイフを振るい続ける。おれの体に当たったものは一つとしてないが、決して安心はできない。奴は目と鼻の先で刃物を振り回しているのだ。見えないとはいえ、当たらない方がおかしい。第一おれはその場から一歩も動けていないのだ。状況は何一つ変わっちゃいない。まるで、大口を開けて飛びかからんとする百獣の王を前に、怯えて何もできないガゼルのようだ。
刺された痛みと眼前の恐怖の前に、おれの本能が下した決断は「死ね」ではなく「逃げろ」だった。動物的には正しい行動なのかもしれないが、そこで死ぬという決断を下せなかった自分に腹が立った。
本能に従ってなんとか逃げようとするおれの指先に、何か冷たく固い感触のものが当たった。手を伸ばして握り締め、首を動かしてそれを見る。男が抜いて、おれが払い落としたあの拳銃だ。こんな所に転がっていたのか。撃つ寸前のものを払ったせいか、引き金さえ引けばいつでも放てるようになっていた。
握って思うことは多々あれど、おれがそれらに答えを出すより早く、男の振り回したナイフは、おれの右脇腹に深々と突き刺さる。おれの体はまな板の上で捌かれる魚のように激しく揺れた。
「この手ごたえ。そこにいやがったなッ」

脇腹からナイフが抜ける感触がする。まずい、悲鳴と手ごたえでおれの位置が奴にばれた。男はおれを逃がさぬよう、馬乗りになってナイフを振り上げる。次は間違いなく急所を狙って来るだろう。

もう痛い思いなんかしたくない。殺したいなら早く殺せと、心の底から思った。しかし、そんなおれの思いとは裏腹に、おれの本能は手にした拳銃を奴に向けて構え、引き金を引いていた。

風船が破裂したかのような乾いた音が響き渡り、焼き焦げた鉄のような臭いが辺りに充満する。奴の胸元に向かって飛んだ銃弾は、撃った反動で狙いが大きく反れて、男の左足膝小僧に当たり、奴に狂った雄牛のような悲鳴を上げさせた。

「おぉ……おッ！　やりやがったな、やりやがったなこの野郎！　絶対に許さねぇぞ、急所なんか刺してやるもんか、いたぶれるだけいたぶってから殺してやる！」

ヤクザの若頭を自称するだけあり、男は撃たれただけでは倒れなかった。とはいえ痛みは強烈らしく、食い縛った歯の根はかちかちと震え、生まれたての子馬のように危なげに揺れている。

撃った反動で銃はおれの手を離れ、夜の闇の中へと消えた。今度こそ手の出しようがない。あぁ、おれは何故こんな馬鹿なことをしたのだろう。下手なことをせず、あの時刺されていればよかったのに。

おれが死よりも辛い拷問を覚悟したその時、この通りからそれほど遠くない距離からパトカーのサイレンが聞こえて来た。人目に付かない通りから、きらびやかなボディコン衣装を纏った女が慌てた様子で飛び出した上、銃声がしたことで、警察も重い腰をようやく上げたのだろう。

サイレンを聞いた男は慌てた様子で周囲を見回す。大方、こんなしょぼい殺しで刑務所に送られてたまるか。俺は組の若頭なんだぞ、と言ったところか。

男は「お前の顔は忘れない。必ず仕返ししてやるからな」と吐き捨てて、負傷した左足を引きずって夜の闇に消えて行く。あの傷だ。

おれを殺していては逃げる時間がなくなるし、この暗がりの中では自分の顔は割れていないと考えたのだろう。実際その通りだ。警察官はすぐにやってきた。血を流して指一本動かせないおれを担架に載せ、救急病院へと搬送して行った。

結局、また生き延びてしまった。そのことを喜んでいる自分に無性に腹が立つ。

もしかしたら、おれは心の中で「死にたくない」と思っているのではないだろうか。考えたくはないが、そうとしか思えない。おれはもう、自分で自分が分からなくなった。

……そして、四ヶ月後――

その三（前書き）

お待たせして本当に申し訳ございません。今回とこの次の部分で完結になります。

その三

「生田成志（いくたなるし）さん、二十七歳。職業、○×社勤務のシステムエンジニア。ご家族とは就職内定直前に死別、兄弟なし配偶者なし、特別な病歴無し……これで、間違いないかしら」

「えぇ、間違いないと……思います」

おれは今、これまで入院していた病院に別れを告げるべく、手続きの書類記入と簡単な質疑を受けている。長い入院生活がたたって、階段の登り降りにも苦労するようになってしまったが、職種が机仕事（デスクワーク）なので、困るのは私生活だけだろう。早いうちに慣れておかねば。

「生田さーん、何やってるんですかー？　送迎バス、出発しちゃいますよー」

「ああ、はい。今行きまーす」

ここで知り合った可憐な女性、暁美響子さんの為にも。

話は四ヶ月前に遡る。

盛森組の若頭と宣う男に刺されたおれは、あの後すぐに救急病院へと搬送され、手術を受けた上で治療のために入院生活を余儀なくされた。

横隔膜に刺さったナイフは致命傷には至らず、素晴らしい外科手術の甲斐あって、不本意ながらも命を拾って生き延びてしまったのだ。

とはいえ、手術から数日間は気が狂ってしまいそうな激痛に耐え、健康保険を差し引いても貯金の半分近くを治療費及び入院費として持っていかれ、ミルメークを溶かした牛乳すら飲めない病室に押し込められるなど、残された傷は決して小さくなかった（この時、看護師たちに内緒で、粉末ミルメークを水に溶かして飲んでみたが、あまりの薄さに辟易し、一口飲んだあとは全て花瓶に流し込んでし

まった）。

術後、喋れるようになって暫くは、見舞い代わりに連日警察の取り調べが続いた。盛森組の若頭に刺されたと証言したのだが、おれは奴の顔を見ておらず、やつがあの時そこにいたことを証明する証拠はなく、おれが逃がしたあの女も行方知れずで、捕まえて押さえることは叶わなかったらしい。

この一件はニュースにも取り沙汰され、おれの名前も公表されたのだが、会社の同僚はおろか、昔馴染みの友達すら見舞いに来なかった。このまま仕事に復帰しても自主退職を促されるだけだと思うといい気持ちはしない。ほぼ全ておれのせいだとはいえ、薄情な奴らだ。

勿論、死ぬのを諦めたわけじゃない。果物を切るのでとナイフを借り、自分の首筋や手首を裂こうとしてみた。しかし、先の一件のせいで刃物恐怖症に陥ってしまったらしく、触れるだけで手が震え、まともに握ることすらできなくなっていた。何と無様だ。情けないにも程がある。

失血死がダメなら窒息死だと、シーツを裂いて首に巻く。抵抗は無かったが、入院生活で身体中の筋肉は著しく弱っており、絞めて絞め殺せるだけの力は残っていなかった。

結局、入院中におれができたことと言えば、院内で面倒を起こさぬよう、じっと回復を待つことだけだった。車椅子を得てリハビリを兼ねて院内を回るうち、他の患者の内情が分かり、顔見知りも増えた。

病院には色々な奴がいた。

何年も寝たきりで口も聞けず、自分の意志すら伝えられない者。死んでやるぞと喚き散らして、看護師たちや他の患者たちの注目を集めようとする者。おれよりもずっと酷い怪我だというのに、いつも笑顔を絶やさずリハビリに励む者。逆に本人が生きたいと思っていても、助かる見込みがないが為に、親族によって安楽死に処され

た者（噂に聞いただけで、本当に執行されたかどうかは分からないのだが）――おれと同じかそれ以上に酷い奴らがいるのには堪えた。
おれは甘えていただけなのだろうか。死にたいのに死ねない奴がいて、生きたいと思っているのに死ぬしかない奴がいて、そんな中自分の都合ひとつで死を選ぶおれが何とも情けなく思えてきたのだ。おれはどうするべきなのだろう。答えを見付けられずに苦しむ日々が続いた。
ある日、車椅子を押して院内を回るおれの目に、『処方薬置き場』という看板のついた部屋が留まった。名前からして患者に投与する薬剤を置いておく場所か。鍵は開いているのにも関わらず、周囲に人の気配がない。何にせよ不用心なことだ。

扉の奥に広がる、薬の瓶が詰まった戸棚を目にしておれは思う。あそこにあるのは何だ。用法用量を違えば死をも招く薬剤じゃないか。あれを放っておく手はない。何をのうのうと生きている。目的を忘れたのではあるまいかと。
同時にこうも考えた。ここの入院患者たちの姿を見ただろう。死んでそれから何になる。意味も何もなく死んでしまっては、生きたいのに生きられない人々に失礼だ、と。
どちらが正しいかなんておれには分からない。生きたくても生きられない人たちを可哀想とは思うが、そんなのはおれだって同じだ。死ぬ理由は人それぞれ。他人が口を出すべきじゃないし、出される筋合いはない。気が付くとおれは、部屋の中に入って、戸棚の硝子戸に手をかけていた。
薬剤の知識に明るい方ではないが、薬を大量に服用すると危険なことくらいは知っている。手当たり次第に飲み込めばどうにかなるだろう。
戸棚に手をかけたはいいが、硝子の引き戸はびくともしない。部屋の鍵を開けたままなのに、戸は閉めておくとはどういうことだ。取っ手にかかる力は益々強まって行く。

力と共に音も大きくなっていったからなのだろう。戸棚を荒らすおれの手を、長くしなやかな手が掴んで止めた。

「あなた、ここで一体何をしてるの。関係者以外立ち入り禁止よ」

掴まれたと同時に振り向いて、そいつの顔を見る。長くしなやかな手に似合いの美人看護師がそこにいた。看護師にしては妙にあどけなさの残る顔で、制服の丈も若干短く見えるが、その方がおれの好みだ。気にすることもない。何より、そのせいで否応なしに強調される、すらりと伸びた格好の良い脚が堪らない。

おっと、そんな邪なことを考えている場合じゃなかったな。何か言い訳をしなくては。

「何ってそれは……、痛み止めの薬を貰おうかと。部屋にあったのを切らしてしまいまして」

「そう、ならあてが外れたわね。ここにあるのはビタミン剤の類だけ。痛み止めはここにはないわよ」

言われて、今一度棚の中に目をやる。彼女の言う通り、中に入っていたのはAだBだと書かれた赤黄色のビタミン剤だった。

よくよく考えれば当たり前のことだ。死にたがっているのはおれだけじゃないし、死に至る程危険な薬物を、投与する患者の手の届く場所に保管しておくわけがない。

あてが外れて項垂れるおれを、彼女は優しく抱き止めて椅子の方へと戻してくれた。

「さ、病室に戻りましょう。今日のことは不問にしておいてあげるわ。こんなつまらないことで死んだって、何にもならないでしょ」

「つまらないかどうかなんて、人それぞれですよ」彼女の言葉に、おれは冷やかな態度で切り返す。「おれにとっちゃ、生きているより死んだほうが有意義なんです。身寄りはいないし、したくもない仕事を続けて体は悪くなるし、そのせいで付き合ってた彼女は逃げるし、こうして入院したって、誰も見舞いに来やしない。無意味なんですよ、おれにとっちゃあね」

「いいえ、それは違うわ」
「違いませんよ。そういうものなんです」
「放っといてください」と踵を返したおれに対し、看護師さんは自分の方へと向けさせ、おれの手を握って言った。
「あなたはまだ生きているのよ。そうして文句を垂れられるだけ幸せだと思いなさい」
「そう思えるのはあなたが恵まれた生活を送っているからだ。あなたはおれじゃない。知ったような口を利かないでくれ、不愉快だ」
看護師さんを突き放し、冷たい言葉をかけた後、おれは何て馬鹿なことをしたんだと一人落胆する。
あんたは恵まれている？　知ったような口を利くな？　そんなことおれに言えた義理か。親切心で言ってくれた相手に何を言うのだ。どこまで嫌味なんだおれは。しかし看護士さんはそんなおれを、何も言わず優しく抱き締めた。
「あなたの気持ち、分かるとは言えない。けれどね、自棄になって塞ぎ込んでも、良いことなんて何もないのよ？　挫けてはいけない。病気なんかに負けちゃ駄目。私で良ければ相談に乗るわ。だから……」
他の誰かからしてみれば、よくある励ましの言葉を羅列しただけだと言われるかもしれない。けれどおれは、何もかもに絶望し切っていたおれには、その言葉は燦々（さんさん）と照り付ける夏の日差しよりも眩しかった。
気が付くとおれは、恥も了見も捨てて彼女に持たれかかり、さめざめと泣いていた。淋しくて堪らなかったのだ。
彼女は彼女で、そんなおれをうっとおしがることなく、優しく頭を撫でてあやしてくれた。こんな気持ちで泣くのは何年振りだろう。こんな暖かな気持ちになれたのは何年振りだろう。おれの心は今、途方もない多幸感に包まれていた。
その女性看護師の名前が『暁美響子（あけみきょうこ）』だと知ったのは、それから

間もなくのことだった。
彼女は非常勤の見習い医学生で、木曜日と土曜日に研修でこの病院に来ているのだと言う。テレビと本以外に娯楽がなく、きついリハビリばかりで辛い入院生活の中、彼女と会える木曜と土曜だけがおれの唯一の心の癒しになっていた。
おれは響子さんに身の上やちょっとした秘密を打ち明け、彼女もまた他では言えないような内緒話をしてくれた。そんなおれが彼女に恋心を抱くようになるのは、ごくごく自然なことだった。

おれには昔、付き合っていた彼女がいた。脳内妄想やゲーム機の中のじゃない。正真正銘現実世界のものだ。同じ職場の同僚で、取り立てて可愛いわけでもなく、どこにでもいる普通の女だった。
出逢いだって仕事中に何度も顔を突き合わせ、互いに難しい仕事を手伝い合って、いつの間にか恋仲になっていたという、ロマンもへったくれもないものだ。つまらないにも程がある。肉体関係も持ったが、いつのことかはっきり覚えていない。覚えていないのではなく、思い出したくないだけなのかも知れないが。
それでも付き合って一年とちょっとは、それなりに上手く行っていた。仕事に忙殺され二人だけの時間を過ごすことは少なかったが、同じ職場で気心も知れていたし、文句はなかった。　その分貯まる一方の金をはたいて、たまの休みに遊園地に行ったり高い店に夕食を食いに行ったり、一日かけて街のゲームセンターを巡って遊び倒したりもした。今思えば何を馬鹿なと呆れるようなことばかりだったが、あの頃はそれが何よりも楽しく、彼女と過ごす時間が一番心地好かった。これだけは今でもそうだと自信を持って言える。
別れを切り出したのはどちらからだっただろうか。口論の切っ掛けはもう覚えていない。食べ物の好き嫌いや、相容れない趣味。価値観の相違だとか、そういうものが積み重なって、いつの間にか別れ話に発展したんだと思う。
おれは謝るのが下手だった。相手のことを考えないで、ひたすら

謝罪の言葉を並べ立てることしかできず、彼女を怒りに油を注ぐばかり。
結局彼女の心を繋ぎ止めること叶わず、あんたなんか大嫌い、そいつはこっちの台詞だと言い合っての喧嘩別れだ。半年前に今の会社を辞めて派遣社員になったと小耳に挟んだが、正直な話、彼女にはもう何の未練も興味もない。おれや彼女の決断が間違っていたかどうかは時間とその後の人生が決めることで、今のおれたちがどうこう口を出すのは筋違いだ。
思い返して見れば、真剣に自殺のことを考え出したのは、あの時彼女に振られてからだったか。安楽死の方法をインターネットで調べ、衝動的に七輪セットを買ったのもその時だ。
前言撤回。おれ――生田成志は半年前に別れた彼女のことを忘れられずにいる馬鹿な男だ。女々しいにも程がある。こんなことで死なれては、彼女だっていい迷惑だろう。尤も、知られることすらないだろうが。
しかし、そんな気持ちともやっとおさらばだ。今のおれにはあの人が、美人看護師・暁美響子さんがいる。怖いものなど何もない。彼女との輝かしい未来が待っているんだ。何を怖れる。何を死に急ぐ必要がある。
響子さんと院内デートを交わすようになって四ヶ月が過ぎた。耐え難きを耐え、しのぎ難きをしのぎ続け、退院間近となったある日のこと。いつものようにベッドの端に可愛らしくちょこんと座る響子さんが、「そういえば」と話を切り出して来た。
「生田さん、そろそろ退院しちゃうんですよね。治るのは素晴らしいことですけど、生田さんとここでお話出来なくなるのは淋しいです」
「それはおれも同じ気持ちですよ。響子さんが居てくれたからこそ、辛い入院生活を乗り切ることが出来たんだ。今更響子さんなしの生活なんて……考えられません」
「ありがとうございます」と響子さんは少しはにかんで言った。

その言葉を聞いておれは我に返る。そうだ、退院するということは、患者看護師の関係でなくなるということ。響子さんとの繋がりが絶たれてしまうということではないか。

このままではいけない。しかし、関係を親密にする起爆剤など、今のおれには持ち様がないぞ。えぇいくそ、何かないのか。ここを出ても彼女と親密でいられる切っ掛けは、パンチのある起爆剤は。

おれの考えを察したのか、はたまた純粋な親切心からか、響子さんは手を叩いて「そうだ」と声を上げた。

「せっかくですから、生田さんのお家で退院パーティーをやりませんか？　生田さんや私の友達も呼んでぱぁーっと。退院日さえ教えて下さればその日に休みを取りますから」

「えっ……。お気持ちは大変ありがたいんですが、退院するとはいえ、この状態じゃろくなおもてなしが」

「そんなこと気にしなくて下さい。料理なら私がぱぱっと作っちゃいますから。こう見えても家庭的なんですよ、私」

こう見えてもがどう見えてるのかはよく分からないが、チャンスであることに違いはない。パーティーと称してうちに来てくれるとは、なんたる僥幸（ぎょうこう）。

彼女の方から誘ってくれているとなれば、脈があると見て間違いない。響子さんのお誘いを二つ返事で承諾したおれを、誰がどうして責められよう。どのような下心があるにしろ、意中の女性が家に来て、手料理を振舞うと言われて、断る男がどこにいる。

おれは彼女に退院の日取りを伝え、その日に合わせて休みを取ると約束してくれた。これで本格的に彼女と付き合えると浮かれていたせいか、そういえば焼けた社宅はあの時のまま手付かず立ったなと頭を抱えていたからか、響子さんがおれの退院パーティーを自身の自宅ではなく、あえて小汚いおれの家に指定したのかについて、考えることもなかった。

◆◆◆

そして今に至る。退院手続きの書類を手早く書き終え、送迎バスと市営バスを乗り継いで、あのおんぼろ社宅へと向かう。

途中近所のスーパーに寄って手料理用の食材を買い漁った。店屋物やレトルトで済ますことが多いおれからすれば途方もない量の食材に目眩がしたが、その一つ一つを吟味する響子さんの姿は何だかとても可愛げで、それを見られただけでも、スーパーに寄って良かったと思う。

男らしく「荷物は全部持ちます」と言ったのだが、入院中に衰えた体力は、厳しいリハビリをこなしても然程回復せず、結局野菜や味噌など、重いものは響子さんが、調味料など軽いものをおれがと分担することになった。男としてこんな恥ずかしい気持ちになったのは、高校時代、文化祭の出し物でチアガールのコスプレをさせられた時以来だ。あの時の写真をネタに、一時期知り合いに揺すられもしたなあ。思い出したくない忌まわしき思い出だ。

みっともなく息を切らし、肩で呼吸しつつ、漸く社宅の前まで辿り着く。四ヶ月前、小火騒ぎを起こした時と何一つ変わっちゃいない。長期で家を開けるのだから、せめて外装だけでも直しておくべきだと思うのだが、ここの婆はそういうことは気にしない性分らしい。

したくはないが、退院したことを報告すべく、管理人室に顔を出す。テーブルの前でクロスワードパズルに精を出す婆の膝元で、おれの愛猫パンチョが丸まって眠っている。「おれに何かあったらパンチョを頼む」という約束だけはきちんと守ってくれているようだ。

「ただいま。鍵はあるかい？」

「あらま。誰が訪ねて来たかと思えば」婆は信じられないとでも言いたげな顔でおれを見た。「生きてたのかい、あんた。暴力団に刺されたって聞いたから、てっきり死んだものかと」

「死んでねぇよ！　重体だったけど死んだとは言われてなかっただろ！」
「あぁ、そうなの。ところで後ろの女の子は何だい？　幾らで買ってきたの」
帰って来て早々これだ。この婆は人を不愉快な気分にさせる天才だ。うんざりする。
「あんたおれに喧嘩売ってんのか！？　響子さんは友人だ。おれの退院祝いをするためにわざわざ来てくれたの」
「女の子があんたの退院祝いねぇ」婆はやや固い笑顔の響子さんをしげしげと眺める。「来る場所を間違えたんじゃないのかい？　この寮にゃ女の子に祝って貰えるような奇特な男は住んじゃいないよ」
「だぁーっ、もう！　とっとと鍵くれよカギ！　いい加減にしてくれ」
あぁ、もう。挨拶になんかしなきゃよかった。早く家の合鍵を出せと手を伸ばすが、婆は何故か首を横に振った。
「もう開いてるよ。一時間前にあんたの友達だって人が、退院パーティーをやるって訪ねて来てね。まだ帰ってないって言ったら『帰るまで家の中で待ってます』だなんて言うものだから。早く行っておあげよ」
「友達……、おれの？」
「あんた以外に誰がいるんだい」
変だな。今日は響子さん以外、誰もここに呼んでない筈だ。まぁより厳密に言えば、小中高大、その中で得た十人の友達全てに声をかけてみたのだが、五人には丁重に断られ、三人は音信不通、残りの二人に至っては「お前は誰だ」と即座に電話を切られた。長い時間を掛けて育んできた友情とは、一体何だったのか。
電話をかけていない中で、おれの退院を祝ってくれそうな奴なんかいたか？　と腕組みして考えていると、響子さんがおれの肩に手を乗せて言った。
「サプライズを企画してくれたんですよ。きっと。電話で断ったり

連絡が無かったのも、生田さんを驚かせようとしたからなんですって」
「成る程。でも、おれの友達にそんな粋なことするやつ、いたっけなぁ」
再び腕組みして考え事をするおれを見かね、響子さんはおれの腕に手を回して無理矢理引っ張った。
「ほらほら、行きましょ行きましょ。あぁ、管理人さん。パーティーではしゃぎすぎてうるさくなるかも知れませんが、宜しくお願いしますね」
「えぇよえぇよ。どうせこの時間は誰も家に居ないからねぇ」
響子さんは婆にぺこりとお辞儀をし、おれを引いて寮の中に入って行く。婆の言う通りどの部屋からも人の気配はない。あの会社で働いて昼時に家にいられるとしたら、有給を使うか仮病を使うかしかないから、当たり前か。
数日前にかかってきた上司からの電話で知ったのだが、うちの会社は今、新しいソフトウェア開発の追い込みに入っているらしく、猫の手も借りたい状況なのだと言う。故に退院間近のおれにも召集をかけようとしたみたいだが、病み上がりなのでと丁重にお断りさせてもらった。見舞いに来ないで、必要な時だけ駆り出そうとするようなやつらに手なんか貸せるものか。

「あぁっと、ここがおれの部屋です。さぁさ、どうぞ」
走り書きされた「生田」の表札に、飾り気のない鼠色の扉。いい思い出は殆どないが、数ヵ月の入院生活を経て帰宅すると、なかなか感慨深いものがある。
おぉっと、扉の前でぼぉっとしててもしょうがないな。響子さんを待たせているし、サプライズを敢行せんと先んじて部屋に入った奴の正体も突き止めなければ。
期待と喜びに胸を膨らませ、勢いよく玄関の扉を開け放した先に待っていたのは。

「――退院おめでとう、生田成志君。待ち侘びたぜぇ、この四ヶ月間、てめぇに落とし前を付ける、この日をなァ」

友達と呼ぶには些か厳つく、剥き出しの殺気をおれに向ける、狂犬のような男だった。

その四（終）（前書き）

一部お食事中の方には宜しくない描写が含まれております。くれぐれもご注意ください。

その四（終）

「久し振りだな糞野郎、俺の事を覚えているか？」
覚えているか、だと？　おれの肺に穴を開けかけた男だ。忘れようがない。
「盛森組の若頭……。あんたも生きてたのか」
「足を撃たれただけで人が死ぬもんかよ。まぁ、こいつを治すのに組長（オヤジ）から貰った小遣い全部使っちまったし、その組長からさんざんどやされちまったがよ。怖かったぜぇ、マジギレした組長は」
「それで……今日は何の用だ」おれは震える歯の根を必死に抑え、努めて冷静に問いかける。「おれの退院を祝ってくれるってのか」
若頭は「誰が祝うかよ」と吐き捨て、不気味に微笑んで答える。
「組長からの命令だよ。やくざがカタギの男に舐められちゃあ、組の名折れだからな、自分のケツは自分で拭いて来いとよ。まぁそれが半分。後は俺の個人的なこだわりだ。たっぷりと可愛がってやるから覚悟しな」
盛森組の若頭はそう言って立てた親指を下に向け、クスリでもキメたかのような薄気味の悪い笑みを浮かべた。
やくざにしてはやることが子ども染みているが、面倒事に関わるのは御免だ。おれは「遠慮させて頂きます」と踵を返し、ドアノブに手をかける。しかし、ドアノブを握って外に出ようとするおれの手を、響子さんは無理矢理引き剥がして背中に回させた。
「なっ、何をするんだ響子さん！　っていうかここは危険です、おれに構わず警察を……」
この時既に、おれは薄々感付いていたのかも知れない。何故響子さんが逃げるおれの前に立ちはだかり、わざわざ奴の元へ引っ張って行くのかを。それでもおれは認めたくなかったのだ。あんなに優

しい響子さんが、もう一度恋に生きようと思える切っ掛けになったこの人が、暴力団なんかと繋がっている訳がないと信じたくなかったからだ。

だが、おれのそんな願いは後に続く二人の会話によって、微塵に砕かれてしまった。

「計画通り、ちゃんと連れて来たわよ、ミツル」

「時間ぴったりとは流石『俺の女』だ。感謝するぜ、キョーコ」

『ミツル』に『キョーコ』。なんで名前で呼び合っている。なんでそんなに親しげに話が出来る。困惑するおれを察したのか、響子さんはおれを畳の上に放り、おれの前髪を掴んで自分の顔の方に向けさせた。

「あんたって本当にバカね。アタシが誰なのか知らないで、疑いもせず何でもかんでもペラペラ喋ってさ。そのお陰でこっちはやり易かったんだけど」

訳が分からない。響子さんは言っているんだ。

「何かの冗談でしょう？　そうか、これがあなたの言っていた“サプライズ”なんですね、響子さん！」

「いい加減しつこいわね。そろそろ現実を認めたらどう？」

響子さんはおれの顔に唾を吐きかけ、一歩引いた所で若頭が腹を抱えて笑う。何がそんなにおかしいんだ。なんで唾を吐きかけられなきゃならないんだ。どうなってんだよ、何なんだよこれは！

気が動転し、考えがまとまらず戸惑うおれに、若頭が気味の悪い笑みを浮かべ、一番聞きたくなかった言葉を口にした。

「まだ分からねぇか？　キョーコは俺の女だよ。四か月前、お前が助けたあの女。あれがキョーコだったのさ。まさか、本当に気付いてなかったとはな！」

「ほんっと、馬鹿よねぇ」響子さんが言う。「あんた、鏡で自分の顔見たことある？　あんたみたいな不細工根暗なんかに、アタシがなびくとでも思った？　長い間したくもない話をして嘘を並べて……、疲れてしようがなかったわよ」

彼女がおれをどう思っているかについては聞き流した。聞いたところで落ち込むだけだから。あの美しい足、不思議と初めて見た気がしなかったのだが、そういうことだったとは。今更言っても遅いのだが、もっと早く気付いておくべきだった。
しかし、そうなると疑問が残る。何故この若頭は自分の彼女である響子さんを、憎きおれの元へと差し向けたのだろうか。
「一つ聞かせろ。おれを殺すのになんで響子さんを使った。おれはただの一般人だぞ。そんな奴一人、道端で始末したっていいじゃないか」
「分かってねぇなあ」若頭は不気味な薄笑いのまま言う。「普通に始末して、それでうちの組長が納得するわきゃねぇだろ。盛森組に盾突いたことを後悔させてやらなきゃ、俺も組長も満足しねぇんだよ。だから、キョーコの力が必要だったってわけだ」
「そこが分からない。響子さんを使って何をしたんだ」
「キョーコから色々と聞いたぜ。てめぇのくだらない身の上だの悩み事だの、死にたがっている……なんてことも、な。だからよ」
若頭はそこまで言うと、ポケットから耳栓を取り出して嵌め、居間のテレビを点けて音量を全開まで上げる。思わず耳を塞ぎたくなるような轟音が部屋中を埋め尽くした。
「これで邪魔は入らない。思う存分てめぇをいたぶれるって訳だ」
「はァ？　何言ってるか分からねぇよ、何しようってんだよ！」
「だから、思う存分てめぇをいたぶってやれるって言ってんだ」
「聞こえねぇよ！　テレビ消してくれテレビ！」
「うるさい奴だな。おい、キョーコ。こいつの口ン中に何か詰めろ」
「はいはーい。何かあるかなぁ……と。これでいっか」
若頭に言われ、響子さんがうちの台所を探って取り出したのは、ろくに洗わないまま放置されていた雑巾。そいつを水洗いして適当に絞り、おれの口の中に強引に捻じ込んだ。腐った魚に牛乳を混ぜたようなその臭いに吐き気を催したが、引き抜こうにも両腕を掴まれてしまっては、どうしようもない。

口に異物を詰められ、唸ることしか出来なくなったおれを、響子さんはニタニタと笑いながら羽交い締めにする。離してくれともがく間に、手に鉄のザックを嵌めた若頭が殴りかかってきた。
鉄の拳は鳩尾を正確に叩き、おれに悲鳴代わりの呻き声を上げさせる。ややあって腹が燃えるように熱くなり、喉元から鉄臭いものがこみ上がって、口の間からぽたぽたと滴り落ちて行く。
若頭は左こめかみと右脇腹に一発ずつ拳を見舞い、おれの耳元に顔を近付けて言った。
「お望み通り殺してやるよ。だが、簡単には殺さない。俺の気が晴れるまで散々いたぶってから、だがな」
自分でも分かるぐらい、血の気がさぁっと引いた。いっそのことさっと殺してやると言われた方がまだよかったのに。
若頭はおれを仰向けに寝かせるよう響子さんに指示すると、靴に包丁の柄をくくりつけ、サッカーボールを蹴る要領で、おれの太股に包丁を刺し入れた。皮や肉を超え、骨にまで達した激痛で、おれの体は丸で金縛りにでも遭っかのように固まってしまう。
苦痛に歪んだおれの顔を見て、若頭はおかしくてたまらないと言う表情で、次々とおれの太股各所に包丁の刃を刺し入れて行く。
あまりの苦痛に脳の情報処理が追い付かず、何度も気を失いそうになるが、その都度響子さんがバケツに一杯の水をくみ、そいつを顔にぶちまけ、おれを桃源郷から現実に引き戻すものだから堪らない。
「丸まってて汚い爪ねぇ。アタシが伸ばしてあげるわ。ほぉら」
響子さんは含み笑いをしつつそう言うと、ペンチでおれの爪の先をつまみ、力任せに引っ張り上げる。爪と指の肉が剥離していく毎に耐え難い痛みが襲い、つい口に捩じ込まれた雑巾を食い縛ってしまう。下水を直接飲み込んだような腐敗臭と味が口の中に広がった。
「どうだ、思い知ったか？　お前が誰に、何をしでかしたか。俺に楯突くとどうなるか……。どうなんだ？　えぇ」

若頭はそう言うと、おれの口から血染めの雑巾を引き抜いて、許しを請う声でも聞きたいのか、顔を近付ける。助けを呼びたかったが、叫んだところで周りには誰もおらず、そもそも大声を出す気力も残っちゃいない。

奴が望んでいるのはおれの悲鳴と、助けてくれと嘆願する声だけだ。それは分かっている。けれど、奴の望み通りになってなるものか。

「あんたさ、この仕事向いてないんじゃないか？　おれは足を刺されても、殴打されても、爪を剥がされても泣かなかったぜ。あの時のことははっきりと覚えている。あんた、足を一発撃たれただけでぽろぽろ泣いてたっけなぁ。こんな中途半端な拷問しか出来ず、高々足の怪我で泣いてしまう奴が暴力団の若頭。こいつはお笑いだ」

いくら自分の命に対する執着が薄いとはいえ、よくもまあここまで言えたものだ。若頭の顔が熟れたトマトのように真っ赤に染まる。あの暗がりの中じゃ相手の表情なんか殆ど見えなかったというのに、それすらも忘れているようだ。

「ほぉ、そうかいそうかい」額に青筋を走らせ、今にも爆発しそうな顔で若頭が言う。「まだやられ足りないってか。じゃあよ、望み通りにしてやるから、覚悟せいや！」

若頭はおれの口に再び雑巾をねじ込むと、響子さんにおれを抑え付けさせ、動けなくなったおれの頭を思い切り蹴り付ける。一発で意識が飛びそうになるが、その都度バケツの中に顔を浸けられて目を覚まさせられ、頭蓋を狙った執拗な蹴りが続く。

左のこめかみから陶磁器が砕けた時のような、鈍く嫌な音が響いた。頭蓋にヒビが入ったに違いない。このままでは本当に死んでしまう。……死んでしまう？　最初からそれが目的だったじゃないか。何故今更それを拒む、醜く生に執着しようとする。

信じていた響子さんに騙され、こんな酷い目に遭って尚、おれはまだ生きたいと思っているのか？　そんな馬鹿な。自分で自分が信じられない。

思い悩むおれの事などお構い無しに、若頭は最後の一発を放とうと、右足を大きく振り被る。今まさに蹴らんとしたその時、響子さんの「やめなさい」という声に、若頭の足が止まった。
「なんだよキョーコ。お楽しみはこれからだぜ」
「それ以上やったら死んじゃうわ。彼は死にたがっているのよ。今すぐ殺すより、もっと苦しませて息の根を止めてやりたいとは思わない？」
今まさにトドメを刺されようとする主人公が、敵の女の一言で命を拾う。テレビや漫画ならそれは改心もしくは離反の前振りで、主人公の側につく予兆だ。
おれはそうであってほしいと、すがるような目で彼女を見つめたが、現実は漫画やアニメとは違う。響子さんは、うちの押し入れの中から使い古しの灯油缶を取り出して、おれの周りを囲うように撒いたのだ。
「どうせもう動けないんだし、このまま蒸し焼きにしてやればいいのよ。下の階のババァも呼んで来るから、こいつが焼かれてもがき苦しむ様を一緒に眺めましょうよ」
最悪だった。彼女の言う通り、今のおれには家を燃やされても逃げるだけの力はない。この上なく苦しい結末を迎えるのは目に見えている。見えてはいるが、まともに喋ることすら出来ないこの状況では、婆を呼びに行く響子さんを呼び止めることさえ叶わなかった。
響子さんが去り、おれの部屋には「友達」を自称する暴力団の若頭と、そいつにいたぶられて生死の境をさ迷う哀れな男が残された。さすがにもう、これ以上酷い目に遭うこともないと思っていたのだが、神はどこまでおれを虐めれば気が済むと言うのだろう。
「そういやぁ、そろそろ夕飯の時間だっけなあ。腹減ったろう、ちょっと待ってな。今食い物を用意してやるよ。とびきり新鮮なやつをな」
台所の隅でかさかさと動く何かを見つけた若頭は、歯を見せて笑った上で台所に向かい、食器棚からフォークを一本引き抜いて逆手

に構えた。
おい、待て待て待て。何をしようって言うんだ、何を食わせようってんだよ！　嫌な予感しかしないぞ。頼む、やめてくれ。と言って止まる訳がないのだが……。
若頭は左足を引きずりながら台所を駆け、手にしたフォークを振り下ろして回っている。フォークの先に何かを刺して捕らえた若頭は、冷蔵庫の中をちらと見て、おれの横たわる居間に戻って来た。
「見ろよ、活きが良くて食べ頃だぜ。ほぉらほら」
若頭がフォークに刺しておれの口元に近づけたものは、長い間ろくに掃除もせず、放置し続けた家特有の代物。長く伸びた二本の触覚に脛毛の生えた六本足。黒い外殻に身を包んだ”台所の王者”そのものだ。
フォークの先は頭と背中の付け根を貫通しているが死んではおらず、逃げ延びようと必死にもがいている。さすがは台所の王者だと感心するばかりだが、それを今から食わされる側からするとたまったものではない。
さぁ食えよと突き出されたフォークを、おれは残る力を振り絞って口を閉じ、顔を左右に振って防ぐ。古くなった油に腐った牛乳を混ぜたような臭いが鼻孔に充満し、胃の中のものを全て吐き出したい衝動に駆られたが、そんなこと出来る訳がない。にっちもさっちも行かないとはこの事か。
「なんだよ、食えよ。食えって言ってるだろう！　あぁ、くそッ……面倒臭ぇなぁ」
若頭はおれがなかなか食べないことに苛立ちを覚えるも、良いことを考えたとばかりに口元を歪ませ、冷蔵庫の中から小袋を取り出して言った。
「そうか、味が気に入らないから食わないんだな。そいつは失礼した。だったらよ、こんなのはどうだ？」
あの野郎、やりやがった！　おれの大好物を、いつか飲もうと楽しみに取っておいた『液体ミルメーク・バナナ味』を……、よりに

よって台所の王者にぶっかけやがった。最高のものを最悪のものにぶっかけて、最低のものに仕上げやがった。
やつに対する憎しみが心の中でマグマのように煮えたぎる。煮えたはいいが、口を塞いで首を振るのが精一杯で、どうすることも出来なかった。
そうこうしているうちに、若頭は力づくで口を開かせようと、おれの唇と唇の間に指を差し入れ、無理矢理開かせようと力を込める。抵抗などしようがない。抉じ開けられた口の中、舌の上にバナナ味の台所の王者が乗り、不快な気分がおれの心を包み込む。
あぁ、最悪だ。この世にこんな不味いものがあろうとは。一刻も早く吐き出さねば。そう思って大きく開いたおれの口に、若頭は再び雑巾を突っ込んだ。
「何吐き出そうとしてくれてんだよ。ちゃんと噛めよ。味わえってんだよ」
その上で奴はおれの下顎を掴み、無理矢理上下に動かした。台所の王者の外殻がおれの口内で音を立てて砕け、この家のありとあらゆる汚染物質がおれの体内を満たして行く。

死にたくない。死ぬのを諦めたわけじゃないし、生きていたいとは思えない。けれどこんな奴に、こんな屈辱的な仕打ちを受けたまま、何も出来ずに死ぬなんて絶対に嫌だ。残る力を振り絞って、欲しいものを買ってもらえず泣きじゃくる駄々っ子のように手足をばたつかせた。
その甲斐あってか、ベランダの硝子戸を蹴破って辺りに散らす。しかし、散らした所で若頭が離れるわけもなく、逆に彼の怒りに油を注ぐだけだった。
若頭は辺りに散らばる硝子を払いつつ、何しやがると殴りつけた。
「騒ぎを起こして人を呼ぼうってか？　そいつは無駄だぜ。こんなにうるさいのに誰も文句を言って来ねぇんだぞ。助けなんか来るわけねぇだろ」

全くその通りだ。わざわざ硝子なんか割らなくても、こうもテレビがうるさければ、いい加減にしろと文句を付けに来るのが常だろう。それがないということは、今この時間、うちの社宅の界隈には人の子一人いないと言うことになる。

おれはこの世界から見捨てられた。いくら助けを呼ぼうが、誰もそれを聞き入れることはないだろう。響子さんが連れて来ている管理人の婆と共に、おれは悔恨を残して無惨に死んでしまうのだ。

これは罰、そうだきっと罰だ。まだいくらでも生きることが出来たのに、それを蹴って安易に死のうとしたおれへ、生きたくても生きられなかった奴らが与えた罰なのだ。僅かな希望を持たせた上で、考え付く限りの苦痛を味わせ死に誘う。おれが一番したくなかった死に方だ。これが罰だと言うのなら甘んじて受け入れよう。だからもう止めてくれ。罰なら十分受けたじゃないか。これ以上おれを苛めて何になる。責めて死に方位は自由にさせてくれよ。

願っては見たが、それで何かが変わる筈もなく、おれの反抗を良く思わなかった若頭は、おれの口からフォークだけを引き抜いて言った。

「無駄、だがよ。そういう態度は気に入らねぇ。二度とやらないように「矯正」しねぇとな」

奴はフォークを逆手に握り締め、思い切り振り被る。その直線上にあるのはおれの左目。「矯正」と称しておれの目を潰すのが狙いって訳か、冗談じゃない。逃げようにもやめてくれと声を出そうにも、さっきのばたつきで体力の方も限界だ。指一本動かせやしない。

誰に謝り祈ろうが状況は何も変わらない。ならば考えるのも無駄かと諦め、少しでも痛みが和らぐようにと目を閉じた。振り被った若頭の手がおれの目に迫る。やるなら早くしろと心の中で呟いたその瞬間、テレビの大音量にも負けないインターホンの呼鈴が、若頭の手を止めた。

「何だよ何だよ、これからがいいところだってのに。しょうがねぇ

な……」
　不満そうに溜め息を漏らし、フォークを放って玄関に向かう若頭。とりあえず助かったが、喜んでばかりもいられない。響子さんが婆を連れてここに来た。このままじゃおれとあいつ、両方共殺される。
　声を出そうにも、這って逃げようにも、さっきもがいてたせいで指一本満足に動かせない。どうにもできないと分かっていながら、おれは玄関の扉を開ける若頭の姿を見つめた。
「よぉ、早かったなキョーコ。それであいつは……」
「ミツル……に……、にげ、逃げて」
「どうしたんだよキョーコ。そんな小声じゃ聞こえないぜ」
　嬉々として喋る若頭とは対照的に、玄関先の響子さんの声はか細く震えている。玄関の外で何が起きているのだろう。おれと同じ疑問を持った若頭は、どうしたんだと半開きにしていた扉を開け放した。
「生田成志さんのお友達……ですね。少しお話を聞かせて頂きたいのですが」
「えっ！？　な、ななな、何故、あんた方が……」
　玄関の先から聞こえて来たのは、婆とは違う聞き覚えのない男の声。心当たりは全くないが、どういうわけか、受け答えをする若頭の声が震えている。家の前にどんなやつが来ているんだと、おれは残る力を振り絞って、首を動かし体を捻る。
　必死に体を捻るうち、玄関先の男と目が合った。桜の代門が刻まれた制帽を目深に被り、青のワイシャツに薄緑のネクタイを締めたその男。なるほど、若頭が狼狽えるのも頷ける。
　奴は自分と婆以外の人間が来ないと過信して、この憂さ晴らしを計画し実行した。故に他の誰か、それも警察官が踏み込んで来るとは全くの想定外だったに違いない。
「あッ、なんですかあの人は。まさかあなたが……」
「や、ヤベぇ！」
　おれと目が合った警察官は、瞬時に事態の異常性を把握。腰に差

した警棒を抜いて、これはどういうことですかと若頭に詰め寄る。
若頭は勢い良くドアを閉めて鍵をかけ、血相を変えて横たわるおれの元へと駆けてきた。
「この野郎クソッ、立ちやがれ、逃げるんだよ！　ノロマが、立てって言ってるんだよ」
逃走用の人質として使うのか、奴は右手でおれの首根を掴んで無理矢理起き上がらせると、残る左手で腰に差した拳銃を引き抜こうとする。しかし焦っていてホルスターの留め具を上手く外せず、引き抜いたはいいが、勢い余って床に落としてしまった。
「あぁくそっ、あぁもう、あぁもう、あぁもう！　こんな時に、ちきしょう！」
落とした拳銃を拾おうと、おれを放って身を屈める若頭。立ち上がる力すら残っていないおれは、支えをなくしてそのまま仰向けに倒れてしまう。
そこでじわりとした痛みを感じ、右手の方に顔を向ける。見ると、さっき暴れた時に割れた硝子の欠片が、右手の中指と人差し指の間に刺さっていた。
引き抜こうにも滴る血で滑って微動だにしない。体の他の部位の痛みをも忘れ、手のひらに収まりきらない程大きな欠片に四苦八苦するおれを、息の荒い若頭が再び首根を掴んで持ち上げる。彼の左手には先程落とした拳銃が握られていた。
遅れて先の警官がこの家に踏み込んで来る。ドアを蹴破って入って来なかった所を見ると、婆からここの合鍵を借りていたのだろう。響子さんは連れと思しき別の警官に手錠をかけられ、悲しそうな顔で項垂れている。
袋小路となった若頭は、おれの左こめかみに銃口を押し付け、聞き取るのが困難な程の早口で言った。
「近付くな！　こいつの血でお前らの制服を汚したくなかったら、この家から出てじっとしてろ、分かったか？　分かったのかッ！？」
「馬鹿な真似は止せ。落ち着け、落ち着くんだ」

警官は手にした警棒を下ろして後退りつつ、宥めようと説得を行うも、興奮し切った奴には逆効果で、おれのこめかみにかかる圧は強まる一方。双方共に膠着状態が続く中、おれはふと、右手に刺さった硝子の破片のことを思い出した。若頭は目の前の警官に手一杯で、おれのことなど気にも留めていない。

おれは身体中の力を振り絞り、握っていた硝子の欠片を、奴の左の膝小僧に思い切り突き刺した。若頭は全身を走る激痛に耐えかねてよろけ、おれを離して俯せに倒れ込んだ。

同時に警官の「確保」と言う叫び声がこだまする。左足を押さえて苦しがる若頭に馬乗りとなり、両手を肩に回して手錠をかけた。

安堵したからか体の節々がとても痛んできた。そうだ、おれは若頭に散々な目に遭わされたんだったな。色々なことがあり過ぎて忘れていた。そんなことを考えているおれの手に、堅く重たいものが触れる。何かと思い握り締めて目の前に引き寄せる。

そこにあったのは、先程までおれのこめかみに押し付けられていた拳銃だった。弾奏には六発の弾丸が込められており、安全装置も外れていて、引き金を引けば弾が出る状態になっている。

こんな苦痛はもう嫌だ。拳銃を握ったおれの右手は、自然と自分のこめかみへと向かっていた。右のこめかみに銃口を押し付け、引き金に人差し指を伸ばす。後はそれを力一杯引くだけだ。ただそれだけなのに、何故それが出来ない。どうして引けないんだ！

結局おれは引き金を引くことが出来ず、拳銃を床に放って右手を力なく床に下ろした。拳銃は程無くして警官たちに拾われて行き、おれの頭上には憎たらしいババァの姿が映った。

「あぁ、ああ。こっぴどくやられたね。おかしいと思ったんだよ。あんたなんかに退院を祝ってくれる友達がいるとは思えないからねぇ。苦労したんだよ、奴らに気取られぬように警察に通報するのはさ。さぁさ、病院へお行き。ここは借家なんだ、これ以上汚されちゃ敵わないからね」

半死人に対して何だその言い草は。思いやりってもんがないのか。

おれはこんな奴に二度も命を救われてしまったのか。
　ややあって救急車が社宅の前に到着。救急隊の担架に乗せられ、おれは今日退院した病院に逆戻りとなった。

◆◆◆

「……ただいま」
「おやまぁ、あんたまだ生きてたのかい」
「生きてたのかって、昨日も一昨日も会ってるじゃねぇか。勝手に人を殺さないでくれ」
「そうかい、そうかい。そりゃ失礼。所であんた、この時間で帰って来るってことは」
「あぁ、辞めてきたよ。きっちりとな」

　盛森組の若頭がうちに押し入って好き放題やらかしてから半年が過ぎた。肋骨が五本折れ、うち二本が臓器の一部に傷を付け、爪は剥がされ、左こめかみの頭蓋骨には直径七センチのヒビ、おまけに便の中から台所の王者の前足が出てくるわで、傷は塞がっても回復は絶望視されていた。
　だがおれは生き残った。時々右手が小刻みに震える後遺症を残し、胃の三分の一を切り取られようと、貯金残高の全てを治療費と入院費に注ぎ込もうとも。
　組の圧力からかこの件はニュースでは取り沙汰されず、おれの所には組長の使いなる男が現れ、大金を渡す代わりにこのことを口外しないという取り引きを持ち掛けられた。組の次の世代を担う若頭が、民間人に落とし前を付けに行って返り討ちに遭ったとあっては、組長としても顔が立たないのだろう。
　奴のしたことは気に食わないが、断って暴力団に付け狙われるのはもう御免だ。おれは黙ってそれを受け入れ、誓約書にサインを交わし、三百万円を受け取った。

あの若頭のその後については、おれが入院してすぐ組長によって保釈されたということしか知らない。とはいえ、数日前に近所の川から、顔を切り刻まれて全裸の水死体となった暁美響子が発見された位だ、生きていても無事ではいられないだろう。くわばら、くわばら。

三百万のうち半分を借家の修理に回し、一年近く行っていなかった会社に足を運ぶ。同僚たちはおれを白い目で見るばかりで声を掛けようともせず、おれの席には見知らぬ誰かが座っていて、無表情にディスプレイを見つめキーボードを叩いていた。

おれはとっくに、この会社には必要のない人間になっていたのだ。今回の一件は組から口止めされていて、何のために入院したのかをきちんと説明出来ないので仕方がないのだが、一応「此方に断りも無しにこの仕打ちは何だ」と言っては見た。言っては見たものの、頭蓋骨を割られた時の後遺症でキーボードを上手く叩けないことを指摘され、上司の勧めで依願退職という形で辞めることとなった。退職金が出るし、その方が君のためになるだろうとのことだが、理不尽な辞めさせ方で法的な争いになったり、それが元で会社のイメージを悪くさせない為の措置だろう。こんな雀の涙程の退職金で何をしろと言うのか。それより何より、社員で無くなったがために、住み慣れた社宅を出て、新たに家を探さなくてはならないのが痛い。

そして、今日が立ち退き期限の日だ。期限ぎりぎりになってようやく代わりの家は見つかったが、その家ではペットを飼うことが出来なかった。まさかパンチョを棄てて行くわけにはいかず、頭を悩ませていた所、管理人の婆が引き取ると言ってきた。おれのことは嫌いでもパンチョのことは好いているらしい。おれは猫以下か。

「あんたともこれでお別れかい。寂しくなるねぇ」

「何を馬鹿な。おれがいなくなってせいせいしたんじゃないんですか？」

「いじめる相手がいなくなるからね。寂しくもなるさ。何もおかしくないよ」

珍しく優しい言葉を掛けてくるなと思ったらこれだ。別れの挨拶なんてしなければよかった。婆の悪態にうんざりし、上の階に登ろうと踵を返すと、奴はおれに背を向けこう言った。

「この子が寂しがるだろうし、たまにはこっちに顔を出しな。体には気をつけるんだよ」

「えっ……？　今、何て……」

あまりに唐突で予想外の言葉を耳にし、どういうことかと思わず聞き返す。婆はそれ以上何も言わず、おれに背を向けたまま、じゃれつくパンチョと戯れていた。聞き違いじゃないとすれば、今の言葉は一体何だったのだろう。どこかもやもやとした気持ちのまま、おれは引っ越しの荷物をまとめに掛かった。

細々とした家具類を箱に詰め、住み慣れた我が家を見回しておれは思う。何故あの時、おれは拳銃の引き金を引けなかったのか。何故絶好のチャンスを不意にしてしまったのだろう。あの時は不思議でしようがなかったが、今では何となく分かる気がする。

おれは既にあの時、心の奥底で死ぬのが惜しくなっていたのだ。実行した自殺は全て未遂に終わり、肺を刺され、肋骨を折られ、体に後遺症が残って尚、おれはしぶとく生きていた。ここまでやって死ねないと言うのなら、おれにとってまだその時ではないのだろう。そう思うことにした。異論は聞くが認めない。

職を失い家を失い、ついでにペットまで失って、仕事をするのに支障をきたす後遺症のおまけ付き。おれを取り巻く環境も立場も、以前自殺を図った時よりも輪をかけて悪化している。

だが、不思議と辛さも恐れも感じなかった。職無しが何だ、家を追い出されるのが何だ、後遺症が残ったから何だ。おれはまだ生きている、道なんざやり方次第でいくらでも切り開けるんだ。何も出来ないと塞ぎ込んでいる方が馬鹿馬鹿しい。そう思うと、こんなことで命を絶とうとしていた去年の自分に笑いが止まらない。おれは馬鹿だ。とんでもない大馬鹿だ。

よし、決めたぞ。こうなったら天命とやらを受けて死ぬまで、どんなに醜く地を這いつくばろうとも、しぶとく生き残ってやろう。どうやっても死ねないのに自殺のことばかり考えるのは時間の無駄だし、何より親から授けれたこの命が勿体無い。決意を固めて握り拳を作り、段ボールを持ち上げたその時、部屋の隅でくしゃくしゃになって放られていた一枚の紙が目に留った。

「こいつは……懐かしいな、持って帰って来てたのか」

箱を床に下ろし、それを拾って皺を取りつつ伸ばしてみる。十か月前のあの日、当たりがなかったと落胆し、自殺の切っ掛けとなったあの宝くじだ。こんなもので生き死にを決めようだなんて、あの時のおれは馬鹿だったなあと、思い出し笑いが零れ出る。

見ると、賞金の引き換え期限が明日に迫っていた。当たっていないのは分かっているが、やかんを包んだ新聞紙にあの時の新聞を使っていたことを思い出し、懐かしさから広げて照らし合わせてみることにした。

「４９の組８９７９５６、４９の組８９７９５６……と。んん、これ……は」

かつて当たっていないと一蹴した宝くじ。あの時はやみくもに一獲千金だけを狙っていたので気にも留めていなかったが、今見返してみたら下の下、七等の四千円が当選している。

この世は最悪だ。それは自殺を決行したあの日からずっと変わることはないだろう。けれど今のおれは、それだけじゃないことも知った。

折角だ。この臨時収入で引っ越し祝いをぱあっとやろう。近所に美味い炒飯を出す中華飯店があったし、そこでこの小さな幸せを、盛大に迎えてやろうではないか。

……たかだか四千円の当たりで舞い上がり過ぎだって？　それがいいんだよ。生きていようが、生きていまいが、この世だろうがあの世だろうが、人生は楽しんだ者勝ちなのだから。

（了）

その四（終）（後書き）

これがハッピーエンドなのか、バットエンドなのかは自分にも分かりません。

その三～その四に取りかかる辺りで、書いている本人が本作の主人公みたいな心境になって、殆ど書き進められなくなり、ここまで遅れてしまいました。続きをお待ちいただいていた皆様に、この場を借りてお詫びを申し上げます。

いつも書いているやつよりも、少し真面目なものを描きたかったのですが、いつも以上に変なものになった気がしないでもないという。

二次創作ではなくオリジナルとなると、毎回終わらせ方に悩みます。話としてちゃんとオチているのかどうか、書き上がった今でもよく分かりません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3201v/

生きていようが、生きていまいが

2011年9月30日03時12分発行